

新型インフル「第2波」に注意

かながわ健康塾
講演概要

川崎市高津区溝口の高津市民館で今月3日に開かれた「第3回かながわ健康塾」(神奈川県医師会、川崎市医師会、読売新聞横浜支局主催、京浜連合読売会協力)で、「ウイルスと人類の攻防―新型インフルエンザはなぜ発生したか?」をテーマにした県医師会理事の羽鳥裕・はとりクリニック院長の講演概要を紹介する。



■ウイルスの特徴

ウイルスは、生命と非生命の中間の存在で、単独では自己増殖できず、他の生物の細胞内に感染して、初めて増殖が可能となる。まず、細胞表面に吸着してから、細胞内へ侵入。その後、

分解と複製・合成を繰り返して増殖していく。

急性胃腸炎を引き起こす

ウイルスの一種「ノロウイルス」は、貝類による食中毒の原因になるほか、感染者の便や嘔吐物が乾燥し、

ちりとなった後も、空中の

微細なちりによって空気感染するのが特徴だ。

また、はしかは10〜15歳の子供がかかりやすく、約30%の割合で、肺炎や急性脳炎などの合併症を引き起こす。致死率は0.2%と

低い。小児の場合は肺炎、

成人の場合は急性脳炎で死に至るケースが多い。また、はしかに感染して10年ほど経過した後に、SSPEと呼ばれる重い脳炎を起こすことがある。

■新型インフルエンザ

新型インフルエンザのウイルスは、ほかのウイルスが通常、のどでとどまるのに対し、肺まで深く入り込んで増殖し、肺機能を破壊する。せきや、くしゃみなどから飛沫感染するのが特徴。国内では、9歳までの罹患率が高いが、死亡率は50歳代以降が高い。

■インフルエンザウイルス

はもともと、カモなどの水鳥を宿主として腸内で増殖する弱毒性のウイルスだったが、突然変異によって、ヒトの呼吸器への感染性を獲得したと考えられている。

1918年に世界的に流行した「スペインかぜ」では、計20000〜40000万人の死者が出た。その後、

57年の「アジアかぜ」、68年の「香港かぜ」で、世界的な大流行が発生。77年には、「スペインかぜ」と同じ型のウイルス「ソ連かぜ」が大流行した。

■マスク、手洗い有効

乳幼児は、呼吸困難やチアノーゼになったり、機嫌が悪くなったりしたら要注意。インフルエンザウイルスは接触感染、飛沫感染が主体なので、せきやくしゃみによる飛沫感染対策として、マスクを着用するエチケットの徹底や、手洗いやうがい、消毒が有効だ。

■ワクチンの効果は、100%

ではないが、罹患した場合、症状が軽くて済む。

第2波の流行があるのか、流行が来るとしたらいつなのか、不明な点も多いが、ワクチンを接種しておくことで、大流行や致死率を低く抑えることができる。過去の例では、第2波で高齢者の死亡が多かった事例もあるので、注意が必要だ。